

学と生の交差点

学問は客観的で普遍的な真理を探究するものであると言われて
いる。それに対して具体的な生は全く主観的で全く個人的な状況に
ある。それならば如何にしてそのような全く主観的で全く個人的な
生の状況の中で、客観的で普遍的な真理を探究する学問が可能にな
ったのであろうか。

今日ではそのようなことは常識化していて、問い直すこと自体を
敬遠する傾向があり、すでに客観的・普遍的真理がそこに提示され
ているかのように錯覚し、自らの学問に対する姿勢を問い直そうと
することさえ怠っている場合が見受けられる。

例えば今日の科学技術の分野では、時々耳にする不正な工事とか
不正な論文掲載とか実験結果の改ざんとかが話題になる。また公明
正大であるべき公共事業が談合で本来あるべき姿が歪められてし
まうということを耳にする。

川島 焔 三

そしてそれぞれの学問分野は細分化・精密化され、専門外の人
は容易に立ち入ることのできない領域を作り、一般化不能な聖域を
作り、その殻に閉じこもり、社会に対する意味付けを忘れてしま
うことにもなる。その細分化・専門化が我々の社会生活とどのよう
に関係するかは視点なしにはその意味が半減してしまう。時間の経過
とともにその意味が明白になることもあるので、全く無意味とは言
えないかもしれない。だから自分の専門が社会との連関性をどこに
見出すのかの視点は常に必要である。

また細分化・専門化された知識は容易に悪用される可能性がある。
専門外の人には容易に理解できない知識は知らないうちに一般人
を欺くことも可能になってきた。善意を装って悪行をする可能性が
より大きくなってきた。振り込め詐欺はその典型である。

そして、誰が味方か、誰が敵かもわからなくなってきたから、お

互いに善意を誓い合うことも必要になってきた。そしてお互いに善意を誓い合う集団を作り、自分の集団に属さない人々には、仲間の秘密を洩らさないように壁を作ることになる。それが経済的なバリアを作ることにともなり、お互いに牽制し合うことにもなる。業務上の秘密はあらゆるところで一般化している。

この様な生の状況の中で我々はどんな確実な行為が可能なのかを確定していく作業を始めなければならない。それは次のような順序で行われる。

- 一、ソクラテスの無知の知とイエスの十字架上の死
- 二、デカルトのコギトとスピノザの神
- 三、ヘーゲルの弁証法とマルクスの弁証法
- 四、西田先生の純粹経験と田辺先生のメタノエティーク

一、ソクラテスの「無知の知」

と

イエスの「十字架上の死」

ソクラテスもイエスも一般的な社会の生活の中では、罪人として処刑されたことになるが、それ故にこそ、「無知の知」も「十字架上の死」も重大な意味を持つてくるのであり、単なるお話や神話と

して片付けられない意味を持つてくる。今日、我々が通常の社会的な事件として二人の死を考えるならば、決してあつてはならないような異常な事態であり、許されない事件である。

ソクラテスが「無知の知」を当時の思想的な状況の中で主張したことは、人類が客観的・普遍的な真理に到達するための第一歩であった。このようなことで、命を懸けて主張した人は、後にも先にもソクラテスだけであり、プラトンの創作ではないかと考える人もあるかもしれない。これを真実と捉えるか、単なるお話と捉えるかによつて、学問と常識を区別する重大な分岐点になる。このような人間の行動を理解可能と考えるか、理解不可能と考えるかによつて、「無知の知」の評価が異なってくる。

今日それぞれの学問は専門化・細分化が進み、客観化・普遍化の原理まで遡つて考える必要はないかのこゝとく考えられ易い。そのため常識的にはその原理を無視することにもなりやすい。そして人類を破滅させることもできる原子爆弾まで作り出した科学技術は原子力発電所まで作り出し、利益優先の科学技術の開発はあらゆる分野において進められている。特に古代原子論の延長線上にあるIT産業は論理学の発展と共に情報の隅々まで支配可能なシステムを作り出しつつある。そして人間の心まで支配可能な様相を呈してきてた。

そのような社会状況は厳然たる現実的事実であり、客観化・普遍化された現実であり、そこに魂の救済など可能なのであろうか。誰かに絶対的権力を与えたら、人間の心の隅々まで支配可能なシステムも可能かもしれない。しかし科学技術はすべての人間の幸福のために開発されてきたのであり、一部の人々にその利益を独占させるためのものではない。客観的・普遍的真理は誰のものか。誰のものかわからないことを知る・「無知の知」こそ客観的・普遍的真理の出発点であり、だからこそすべての人々のものであると捉え切るこそこそ肝要である。

しかし事態はそんなに単純ではない。今日科学は宇宙の誕生から終りまで、我々の生活の隅々まで対象にして、客観的で普遍的な法則を捉え切る視点が如何にして可能かが問われようとしている。それはギリシヤ時代の自然哲学の展開から今日の宇宙物理学を射程に含み、人間の意識の隅々までその射程の中に含んでいる。そして人間としての個々人は宇宙の展開の隅々の中で、何かを意識して喜び悲しみ、その思いの丈を展開している。

そこで個々人は何を意識して生きているのか。その個人が生まれてから様々な経験を通して、その経験の範囲の中で生きているわけである。自分の経験外のことは知ることもし触れることもできない。自分が触れた範囲の中で世界と交流する。自分が交流した範囲の中

で、世界の法則に関係する。そこにはその人が知り得た限りの世界の法則がある。それがその人の学の領域である。その学の領域の中で経験する生活感覚は刻々変化する「学と生の交差点」になる。その交差点で何を行為し何を意識するかはその人が持つて生まれた本来の自己意識である。その自己意識の深まりはいかにして可能か。イエスは十字架上でいかなる自己意識を持ちえたのであろうか。ソクラテスは毒杯を飲む時いかなる自己意識を持ちえたのであろうか。他者には推測の域しかありえないが、それが本来の本人の自己意識である。プラトンはソクラテスが毒杯を飲む前にどんなことを言ったか報告している。しかしそれがソクラテスの自己意識であったのかどうかは確定することのできないことである。

イエスの自己意識も聖書にそれなりの表現はあるが、それもイエス自身の本当の自己意識であったのかどうか確定できないことである。ソクラテスの無知の知はソクラテスの自己意識を超えて、客観的で普遍的な原理であることを意味している。そしてソクラテス以外にそのような理由で処刑された人の存在を私は知らない。しかしイエスのような十字架上の磔の刑で処刑された例は他にもたくさん報告されている。それは学と生の交差点で、その時の支配者の不都合によって処刑されたことになる。十字を切る象徴的な行為は「学と生の交差点」に命を懸ける象徴的な行為である。

ソクラテスもイエスも不正に殺されることを受け入れたのは死後に天国に行けることを確信していたからである。天国は神話の世界であり、科学的には証明不可能な世界である。それは幻覚であり、妄想なのであるか。科学的にはそのように断定することもできない。しかし人類のユートピアではある。ユートピアは幻覚や妄想とは違い、全人類の希望であり、信じることの光である。ならばそのユートピアを実現するかどうかは一人一人が信じる行為の中にある。それが科学的に証明される唯一の道である。

自分の欲しないことは人にしない、自分の欲することを人にする・極めて単純なことである。それは誰でもが希望をもてる社会である。自分の行為がその人のためになっているかどうか常に問われる。お互いがその人のためになっているかどうか問われる。その人のためを思っていたことが必ずしもそうでないことがある。それはお互いに対話することによって解決することになる。

それでは対話の条件は何か。お互いに自分を客観化することから始まる。しかしその客観化が案外難しい。その対話に関連する事象に関して、自分の考え方を完全に客観的に言語化することは案外難しい。自分に不都合なことは隠してしまう場合が多いからである。それでも対話を誠実にすれば問題の所在は次第に明らかになり、自分の客観化作業は次第に有効になってくるであろう。

お互いに自分に不都合なことは隠したままで話し合いをしたりすると実りなき対話になる。それが喧嘩になったり戦争になったりする。互いに相手を尊重する（お互いに人格を尊重する・お互いを手段としてでなく・目的として対応する）ことさえできたら、効果的な対話が可能である。そんな対話の常識も十分には成長していなかった時代のソクラテスの死もイエスの死も、その犠牲によって有効な力となってきたのである。

二、デカルトのコギト

と

スピノザの神

客観的普遍的真理は確実でなければならない。近代自然科学の基礎を築いたと言われるデカルトはすべての知識が伝聞による言い伝えであり、疑えは際限のない知識がなんと多いことか。聖書の記述は伝聞であり、疑えはきりが無い。しかし数学的真理は論理的に導き出されたものであり、その推理に間違がなければ、十分に確実である。しかし何を確実なものとして第一に確立したらよいのか。数学的真理の確実性の原点は何であるか。

その原点を定めるために、あらゆる真理を疑い、神をも疑い、神

が欺瞞者であるとしたら、何から何まで欺く欺瞞者がいるとしたらどうであろうか。そのような欺瞞者がいたとしても、そのように考えている自分は確かに存在している。コギト・エルゴ・スム（私は考える・それ故に・私はある）。デカルトはそのように叫び、近代科学の基礎を築いたと言われている。

「神が欺瞞者であつたとしたら」という極端な仮定は、一般的には敬虔な信者にとつてはありうべからざる仮定であるが、そこまでも疑つても疑いきれないとき、本当の信仰が生まれるとも言える。そこまで行つたとき本当の確信というものが生まれるであろう。神が欺瞞者であつたとしても、それでも自分は存在するという確信は、疑いが真直ぐに確信に転化される原点である。科学的真理とはそのような推論の連続によつて構築されるべきものである。ところが哲学に論拠を置かない科学者は研究の利益に誘惑される。科学技術の不正利用はそのような推論の弱さである。常に原点に戻る誠実さが要請される。

しかしデカルトは神の誠実さを証明したわけではない。神の誠実さを信じただけである。だから油断するといつても欺かれる可能性がある。神への信仰は神の誠実を信じるることによつて初めて可能である。従つて神への信仰が科学的な確実性を保証することになる。科学的な確実性は神の誠実を前提するが、科学的な確実性から神の

誠実が結論できるわけではない。神の誠実が聖書に記述されてはいるが、聖書の記述が科学的に証明されたわけではない。

デカルトより三十六年遅く生まれたユダヤ人のスピノザは「デカルトの哲学原理」を研究し、聖書を研究して「神学政治論」を著し、その学問の原理を尋ねることになった。そして聖書を研究するだけでなく、聖書を読み込む力としての知性を磨くことの大切さに気付いた。「知性改善論」としてその足跡が表された。そしてその完成が容易でないことに気付く、真理を具体的・体系的に展開することによつて初めてその知性の改善の道も可能であるとの見解に達し、「幾何学的に論証されたエチカ」という倫理学書を完成させた。倫理学さえ数学的に論証されうるといふ確信はすべての真理が数学的に導かれることを示唆している。

十七世紀は数学が飛躍的に発展した時代であり、世界や宇宙さえ数学的に論証されるという確信が根底にある。スピノザの実体即神は世界の第一原因であり、すべてが神的必然性によつて生起するといふ確信によつて支えられている。我々の行為のすべてが神的必然性によつて生起することになる。そして我々の真理を求める愛も神が自らを愛する智的愛であるという。人間の感情も定義公理・定理によつて数学的に導かれるという。極微の世界も数学的に導かれることが前提されている。これはライブニッツの微分・積分

の理念に導かれる。それは神の世界であるから、最善であるということになる。この世界は最善の神の国だということになる。

戦争などむごいことも皆最善のこととはなかなか考えにくい。それも神の目から見れば最善の神的な世界であるとなかなか考えにくい、それは人間の目で見るとあるということになる。それならば如何にしてそのような矛盾を克服できるのか。そのような不幸が起らないようにするには、人間の知性を改善しなければならぬといふスピノザは考え、「知性改善論」を完成させようとしたが、一六七七年道半ばで四十五年の人生を終えた。その後ヘーゲルがスピノザの哲学の有効性を見出すまで、死んだ犬の如く捨て去られていた。

三、ヘーゲルの弁証法

と

マルクスの弁証法

十七世紀の大陸の合理論に対して、イギリスを中心にした経験論の理論が対立して、現実の経験則とどのように整合性がとれるかという問題は正に客観性と普遍性を求める学問上重大な関心事になった。そこにカントの批判主義が決着をつけようとしたが、ますま

す矛盾が深まっていったと言ってもよいであろう。その矛盾を解決しようとしてヘーゲルが弁証法にたどり着いた。経験論と合理論の解決の方向はカントの二元論的な方向とヘーゲルの汎神論的な方向が生まれた。

デカルトは精神と身体を区別することから、二元論的であり、スピノザは精神と身体を統一的に見るので、汎神論的であると考えるのもよいであろう。そのような系列で考えた場合、カントは二元論的であり、ヘーゲルは汎神論的な弁証法であり、マルクスは神の存在を前提しない唯物論的弁証法である。ヘーゲルの観念論的弁証法とマルクスの唯物論的弁証法は神の存在を前提するかしないかにかかっているように思われる。唯物論は神を前提しないから、無神論として排斥されることがあるが、自然科学は神を前提せず、物質の運動そのものから、様々な法則を見出し、そこに不思議な神の力のようなものを感じるといふことにもなる。ヘーゲルの弁証法は近代的な自然科学の発展がまだ十分でなかった時代のもので、キリスト教的な神話を十分克服していなかったように思われる。

人は多くの場合科学的に証明できないことを信じたくなる習性があるようである。その点マルクスは科学的に論証することをより忠実に実行したまでのことである。一七七〇年生まれの前ヘーゲルと一八一八生まれのマルクスとは、五十年近い時間のズレが時代の差

となり、様々な思想上の違いになる。

個人が生まれた時代の状況と個別的な素質が様々な絡み合い、その人の人格としての学と生の交差点が生まれる。ある人・思想家の個性は他に代わることでない純粋な存在である。それぞれの純粋な存在が輝きだす時、全く新しい神話が誕生する。それは科学的に証明できないけれども、その神話を信じることによって初めて自己が生まれ変わって、自己が甦生する。

ヘーゲルは青年時代にフランス革命の熱気を経験し、ナポレオンの活躍を目のあたりにして、具体的な世界精神が躍動する姿を目の当たりにして、自己の思索の具体的な展開を夢見て、ヘーゲル流の神話を形成した。マルクスは資本主義の留まることを知らない発展を経験し、労働者の悲惨を目の当りにして、「万国の労働者よ 団結せよ！」と呼び掛けて、あたかもそこに永遠の楽園があるかのような神話を形成した。

人は誕生以来、個別的に経験する日常的な体験を通して、学的な素養が培われる。どの分野の学的な勉強をどのくらいしたかとか、どんな種類の運動能力をどのくらい磨いたかによって、その人の素質がどのようなものになるかが決まってくる。そしてその素質が花開いた時その人だけにふさわしい神話が形成される、それがその人の安定した世界になる。この経験と体験の連鎖は常に弁証法的に展

開する。人は神話なしには生きられない。自己にふさわしい神話を求めて努力する。その可能性が閉ざされたと感じた時、人は自己を滅するか他者を攻撃する。その神話の願いを永遠に託す時、人は永遠に生きることになる。

純粋な存在としての個人の神話は即自的には自己意識の中において全く個人的主観的なものであり客観的・普遍的な学問にはなりえない。それが可能であるためには、自己意識の中にある世界を客観化し、論理化し、普遍性を提示することから始めることになる。人生において様々な経験する出来事は一見雑然としていてどのようにに整理するかによって個人の神話が可能である。雑然とした日常の経験から、筋道を立て、纏まった理念を形成するためには、客観化・論理化・普遍化の作業が必要になる。

どんな視点で纏めるかがその個人の人生観・世界観・哲学観になる。確かな論理性のない断片的なお話は神話として様々な形で言い伝えられてきた。よく纏まっていた筋道が明白なものから、断片的ではあるが、何か本質的なものを言い当てているものまで、様々であろう。しかし客観化・論理化・普遍化の作業は神話のお話と厳密に区別される。学問の客観性・論理性・普遍性は、こまごまとした生活の主観性・多様性・具体性から生まれるが、それは如何にしてか。先ず個人個人のこまごまとした雑多な主観的な経験の中にある

共通した理念を引き出すことから始めることになる。その共通した理念に様々な特徴が現れる。

客観性・論理性・普遍性があればそれは哲学でなくともよい。それは科学技術という学問になる。植物や動物の生態を研究することもできる。ある現象・例えば虹はどうして起こるのかを、誰にでも理解できるように説明する作業も学問である。そのようにして様々な学問が可能であるが、哲学という学問は世界を統一的に探究する学問である。世界はどのように学問的に説明可能かを探究する学問がある。

ヘーゲルはキリスト教の伝統の中で育った西洋社会で、世界を統一的に捉えようとした。マルクスは近代の自然科学技術が飛躍的に発展しつつある時代に、労働者の悲惨な状況に接することにより、全く新しい神話を作り出し、労働者が団結すれば平等な社会を実現できるというユートピアを描き出した。科学技術の発展によって支えられてきた資本主義の社会は必然的に社会主義に向かわなければならないということ、サイエンスとして、ヴィッセンシャフトとして描き出そうとした。そのようにして西洋の社会で発展してきた資本主義は、全世界を席卷し、富める者と貧しい者の格差を益々拡大し、それを定着しようとする動きがあちこちで広がろうとする。そんな時代に生まれたマルクスはエンゲルスなどの協力の下で世

界革命を呼びかけた。

四、西田先生の純粹経験

と

田辺先生のメタノエティーク

西田先生が四十四歳の頃、西洋では第一次世界大戦が始まり、四十八歳の頃ロシア革命が起こっている。田辺先生は二十九歳であり三十三歳であった。西欧がこんな状況であることは、西田先生も田辺先生も十分承知していただろうし、人類の文明に大きな不安を感じていたであろう。

西田先生は若い頃から東洋文明の核をなしていた仏教に慣れ親しんでおり、特に禪宗の坐禪に打ち込んでいた。仏教は西洋の汎神論に通じていると言われるように、精神と身体を二元的に分けないで統一的に捉え、人生のすべてをかけて禪に集中することになる。様々な人生経験をすることで、世界と一体になる経験をするようになるが、『善の研究』の冒頭でその純粹経験について述べている。つまりその時々感覚や意識がそのままに、自分に現れる瞬間のことを意味している。他人の意識を自分は経験することができない。その時々意識はそのまま宇宙と繋がっている。それは世界の状況

と繋がって、自分が何かを意識して純粹經驗をしているということである。

そのようにして善も我々の純粹經驗である意識の中に現れる。純粹經驗として自分の意識に現れた感覚や知覚や観念や理念や概念をどの様に体系化するかが問われてくる。純粹經驗としては、イギリスの經驗論を踏まえながら、それを超える世界を打ち出そうとしている。そしてそれは汎神論的な宇宙とつながるということとは禪の世界の新しい理論となり、日本の哲学が世界に通用する素地を築いたとも言える。それは禪の修行から到達したものであり、西洋文明を超える新しい原理の可能性を秘めたものである。純粹經驗の内に現れる感覚や知覚の世界は、単なる感覚や知覚とは区別され、その奥に大きな実在の世界が隠されている。それに気づかないと、感覚や知覚も薄っぺらなものになるということになる。

四十四歳の時帝國主義の衝突の現実を知り、四十八歳の時共產主義革命を知った西田先生は、西洋の列強の脅威を深刻に感じていたと思う。人類の平和を導く新しい原理は如何にして可能か喫急の課題であったと思う。西田先生より十五歳若い田辺先生にとっては、より若いだけそれだけ深刻さの感受性は強いものがあつたと思われる。

第一次世界大戦の勃発の頃には、田辺先生は西田先生門下に参加

していたと思われるが、西田先生は何故田辺先生を後継者として選ばれたのか、後に展開されるお二人の関係を考えると、多くの人々にとっては謎のようにも思われるであらう。しかしある意味では当然の成り行きであり、どちらに軍配を上げるかというような類のものではなく、思想の発展というものであり、両者を正確に理解する必要がある。

『指定判断について』という田辺先生の最初の論文は、先生が二十五歳の時のもので、西田先生の純粹經驗に一步踏み込んで、その經驗を指定するという作業を加えることにより、全く新しい哲学の可能性を打ち出したのである。その作業は純粹經驗があくまでも主観性を中心としたものであるのに対して、「指定する」という作業は客観性を希求するところにその特色がある。この違いは西田先生が宗教の世界に傾斜するのにたいして、田辺先生は客観的な科学としての学問に傾斜するということになる。田辺先生は処女論文以来自然科学への関心が強く、常にその方向で思索が展開されている。時は丁度列強の帝國主義が荒れ狂う中で、如何にして平和を維持するかという時代である。日露戦争・日中戦争・太平洋戦争と、時代は荒波にもまれにもまれた。平和への智慧を田辺先生が西田先生に求めたのも自然な成り行きであつた。そしてそこにどうしようもない亀裂が生まれたのも無理からぬことであつた。

そのような中で資本主義・帝国主義を終わらせるための共産主義が台頭し、新しい動きを察知して、民族としての日本の将来に対する備えを考えるために、「種の論理」を展開した。西洋文明に対して東洋文明という対立軸も生まれることになる。それは太平洋戦争・第一次世界大戦へと突入するという素地となった。西洋文明が東洋文明を圧倒するという決定的な事件は、米軍による広島と長崎への原爆投下であった。かくも悲惨な事態を目の当りにして、田辺先生はメタノエティークという全く新しい概念に到達した。

戦争への突入を積極的に先導したわけではないとしても、結果として自分の考えが日本民族を破滅に導くことになったことを痛烈に懺悔し、その懺悔の底から全く新しい認識上の原理が浮かび上がってきた。我々人間の認識は常に全く客観的・普遍的に生まれるものではなく、自分に都合なように生まれ、それを自分に都合よく解釈し、都合よく行動するので、そのような恣意が入らないような配慮が必要になる。客観的・普遍的な真理は常に自らを懺悔し、恣意が入らないように、自らの考えを措定し、他者もそのような配慮に従って自らの考えを措定して、対比しながら共通項を確定していく作業が必要になる。そこには常に自らを懺悔する心構えが必要であり、それなしには客観的・普遍的真理を確定する方法がない。

一般には立場の強い人の考えが真理として採用されやすいが、そ

れは大きく真理から外れる危険性がある。勝てば官軍、負ければ賊軍という一般的な風潮を克服するには懺悔道が共通の原理になることが要請される。

第二次世界大戦における原爆の投下という二度とあってはならない悲劇を通して人類がようやく到着した知恵がこの懺悔道である。そしてこの懺悔道が人類に定着した時に、人類が平和に発展する可能性が開かれるのである。とはいえそれが今日保証されているわけではなく、依然として勝てば官軍、負ければ賊軍という事態は一向に変わってはいない。

人類の恒久平和を実現するためには、各々の個人の能力が他の個人によって妨害されることなく、最大限発揮できる社会システムを作り出すことである。それは他者を単なる手段としてではなく、他者を常に目的として尊重することである。お互いにそのような配慮ができるようになった時、初めて恒久平和への可能性が開かれる。個人の学の広がりや生活の軸が交差するところにその可能性が見えてくる。

(かわしま かいぞう)

津山工業高等専門学校名誉教授

KHJ岡山きびの会 会長

NPO法人津山・きびの会 理事長